

八十浦之玉

中卷上

上三

太政官文庫			
	二	和	
	六	書	
	五		
四	一		
	九		
	七		
	六		
冊	架	函	號

内閣文庫			
	二	和	
	六	書	
	九		
三	一		
	函		
	九		
	四		
	六		
架	冊	號	類

内閣文庫	
番號	和 11656
冊數	4 (3)
函號	201 45



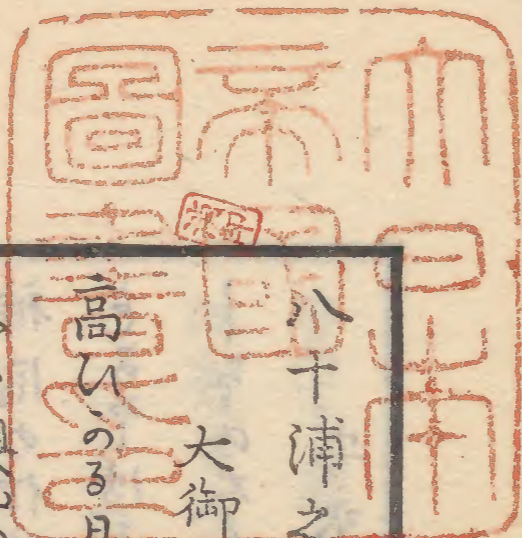
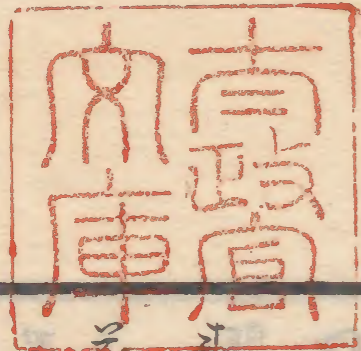
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





八十浦之玉中巻上

大御世壽比

平 宣長

くみ奥山の葉廣くは榎志の葉はるるまはまし志の枝の栄
えいませとをろろみてはやまかここちや深きまつば

櫻の歌

春日と山の間さういさゆらけ花見ふいとゆめぬれ
花くとしわきへの梅人をも見ゆ来ぬあともはらわらさくを

明和六年江戸より楫取魚彦の兄せむかこせむる歌

春もと花もさし梅の先て秋もとさゆらけ黄葉を見ると

○八十浦の玉中

○上ノ一

人さほも来入をささるふよひさのあらしきし遊たひし縣居の
君まささきかちしそのちるも居

此歌も答てよみてやりける歌

縣居ふ人さほも来入をりやうをうてさあみつく日と君の欠
の去ほしけまくちるへぬうへあさふしけむよその縣居

こふてと大人を志ぬひつる歌

神風の伊勢は海ふる浪の常世の浪れやこへかかくし
とちやはろくねをうらみそわぬぬの仕つまづり加茂のう
しその大人をや

安永六年四月渡會宮も詣り

豊宇氣の神は免くともふやまきのともぬのちぬくさや
の免くみぬふやたのとと

五十鈴の宮も詣り

神のらやかこしよろしたさうしうぬさくの宮を山川のさや
けき宮本主のうるはしきさまこのひのかやく宮の玉垣のハ
重ゆとやちるみつ宮は此大宮しちやゆとろしと

天明元年十月晦日岡部翁十三年の手向とさしける
時へる詞る免る歌

わのまひのおややまし、縣居の大人をとも言たぬあ
とた古こやまぬいのおさなはしめ給ひおこし給ひて天の

下ふ美代不深やち一好ひつゝ好ふ廣き長た清くを
と一とふふいしついで深きまつゝいふよそ入てふは物と好
一又そのかつうつゝ清き一のたつた清き陰とあひまつゝ志
めひまのよかひて好む人む物とあしおなるあぬるん
詞をいさむさへと絶てあつゝえさかけむとたれもおもや
えひいこのさほゆひてこのまへや入まつゝむ何ふよそこのと
ほめまおらむあふく好むつゝこのまへめふまつゝむ

真鴨よ加茂の大人も玉ならもたさひ白玉う後人のうぬけ
る玉のまぢらむらやふもふとみ久方の天見ることくつふき一
そのまぢら玉の光をやけふし光をやけらむの年を本短れを今

日たもその月日をあら玉の年もおや一も小車のえくらう本
短ゆきせや一もかぬり本短ゆくはやもいゝるふやてく短
まける白玉の心あつゝやけふしその光をや

天明三年三月九日鈴屋ゆ友とちつ中へ教ふみける時よある
をやめつゝの真手ゆまつたもつさく鈴の五十鈴のまぢり鈴の屋
も志この一まぢやの丸木屋の小屋もをたれと志ぬるも揚ふみよ
ら一のちりもちつゝけふぬれも伊城のいねそのまぢ山をみら枝
さ一とふ生ふらは一まぢや一まぢみ松の本もろるは一とふのま
一山をいさぬやう海のまぢいよふ浪のまぢ志ら一もやと一
一ふ来入つゝいで真十鏡見一けきうめふまぢいそのまぢ

鈴屋とよ三十六の小鈴を赤き緒ふぬきふれてきり
 も引あらしとてしらさききりしきき屋の柱むけ
 おたふれとかくしゆもあまむ
 寛政十年古事記傳とてしるかききりしきき屋の柱むけ
 ひて家子人こつてて教ふませけるまけの額ふ
 書を披きて古を思ふとてしるかききりしきき屋の柱むけ
 あるまの書をたのむとてしるかききりしきき屋の柱むけ
 家の業ぬかともりしききりしきき屋の柱むけ
 右十一首

立春

田中道麻呂

天原よりさけられも八重がきりかきりしきき屋の柱むけ
 春月

相聞

清やらの梓むらさきはるの夜のかききりしきき屋の柱むけ
 あららはあらしめるおをちけぬや一夜からしはるくあまぬ
 と別きてらしも帰るさの道はしらゆけりしきき屋の柱むけ
 ふの何れかたをさきものんちく夜鳴あけむさこの志きき屋の柱むけ
 かくららるるねしきき屋の柱むけ

寄水

奥十川磐本多きちゆく水のゆく
水鳥

芦鴨やをーこころ鴨のほふらう
さしきらく神代ゆき

草屋處女

智奴男やぬい男らふけい
さしきらくこふは

松浦佐用姫

遠からぬ旅の氣もこき妻をとお
あともちらぬが國もあ

東歌

これやこのこらひかほ
あかしまうらなむと

防人

百俵の道をちえきぬさのねいともいふおもきまよせぬふを

松坂よとまうおて古言問ちきらめなる歡のうら

をいぬ美濃人らしきま昔古尾張よとみて神風の伊勢國

ぬる飯高の君ありゆくと尾津のさねとつひふえつとめく

こ三重をさちたまの濃をさち遠つ人松坂よきて久方の

天つ神代ゆきくと言傳へこ言書の幸ふ國の古言お言の

うけを口ひめらさしくおへとねもころもまもるまふ

言書の多きく國の古言お言の意をあらの人をいへまへ

そをきくやぬやひまりのつとまやぬせよそのもろへも興事を

防まるとやぬく言書のくくぬぬる古言のこやの意をお

のうー得てあるまふまそーぬの美濃人らしきまよの

けのらぬね松原まつとらもつとらまへれ飯高のらひもつ

とさけ尾津のさねとまかるとれこのま常より尾張の國は

らゆらかき名見屋お里の諸人おれとへむとのおとさまくら

旅のやとゆとしげや一人の侍も朝よひもいこういさ

ぬまの日はくともさうふこの夜おらるもまらふ古言の

言おあろをきかふーらーと

國をいぬちもゆれとも古言のかくおとれる國をあらめやと

右十三首 道麻呂ち美濃多氣郡榛木村の人 田中庄兵衛といふ尾張名見屋に住

眺望

三浦黒志古

石見の海波もあつげくおわくく八重の塔はもかきむらかき

積雪

ひやがふふきをふりく妻こもる屋上の山は嶺もまーろ

祝

加茂山のゆをひやおふの松もえをいやらのちえもさかえま

右三首 黒志古も石見國濱田家士字不知

雨を乞ふ歌

藤原秀満

うまのりのちやまかしくゆけとあゝ大王のまこしをさ
國のみつきとこも田もとおくくの田も水せきを痛ふらつる

こやひ半もさたうつげてあゝの保くのあくらあゝあゝ
の足えらるまをさくそましく田のうもち水うね月もけ小畔を土
さけて天傳ふ日のてるのらもやのくとまももまもまもまも
とほち雨もふれやまも夜手のぬれもさかればより植む時をゆ
けさるの苗もふしうらひぬ法民ともまをうふまをみや
まよの乳もふことくましくのたまちこひぬけく天地の神
こやひうらちりまもまもまもまもまもまもまもまもまも
し天つ水今もふらねあるもらひも
ひやしふもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも

右二首 秀麻呂も石見國三隅村醫師斎藤利三といふ人

寛政元年四月朔日鈴屋大人名見屋子ゆき路へるるさ
ふ白子の里もややう路へるるを人々と共中稲生山の路へ
んふゆりて致ふみ路へるるを人々と共中稲生山の路へ

平 春門 旧名 並樹

何つさうやういを時と年毎中もさるるふちふ稲生のや山の
路へるるもけふとも卯月ふちぬやとたててうらひふけそ
ちのれやをわかぬ居の鈴屋は宇士の命めつうへるまれり
来まてうへはせる致をしきけらうへるるのふちい
まの盛の時まきまておとちゆるかとも
路へるるもけふとも卯月ふちぬやとたててうらひふけそ

大國主大神の御像ふかしこけれともみく書

掛まはゆりたおも言巻を綾ふ忍し天下國おさうし
作にまし事をしほして加夫呂伎の流言はほま天降
涉はのみことふさうしこと何らちふこと天地のよとあひのま
はこみぬうらふちうらめさし現身を國避まして御靈
をも出雲の國ふ高殿をさく見ふてくち宮とちつまう
まして幽事おさうし免さなる大國主大神を家こぞ
ふ向つらちら免やい路へるるを人々と共中稲生山の路へ
かみことのもれも何しきもことふち大神をさうし免しける

松

木の國は名草小國ふ神代よきまのいまは伊太祁曾は
大神ともよ八十木種韓の地ふは宇多いして大湯國內の山
ふ野よきあましぬれをちあやしくふ生ふちさつえ梓弓まき
たさた露霜の秋ををみちておもしるまあを何れとも白
雲のいゆきはくある足引の峯ふも尾ふも澳おちの音と
やうはふくちよのひさうらうちのるも玉志うの殿の庭ふもむ
くらふの賤ふ小屋ふも松ちしと取もくかき枝ふしおひと
おむけさかくのこやけふふはあれとかうはあま生あまふれと雲
磐なるちれけ松ふもくうへま末もまなけけ陰しあて春秋
いちいごころふ免つるまおとくねるもの世お人みぬめなる

うへぬらう時ちうふ免つる松の樹

布太良山大神二百年は御祭の日よある

下毛野二荒の山ふ大國の國はゆきとや奥山の真木は大本
を非又太くくほりて造りて宮柱太くまうく、常やほふ
志おまりはせざる東照神のみこやい天皇の大湯楯やし鹿
玉の年月まねく村肝おんをくつき現身の方もふね志
らまうとあましいもくみまうて五月蠅をけけある人を
むけふまひやちし強ひておのしめる罪のこやしくおし
てる難波の水門ふ神はらひちをくむふまうふとあらしくほの
陰の八百路は八百會ふちをちのさひ國津罪はらむ清めて

天皇の朝廷をばしつ天の下四方は國も遺る罪おるに罷な
く安國と百の官と民草もあひまぢつ心木綿花のひや
はるるつ、今しつしつふふとつ、兵と清庫ふをさめ夏
まの草津道の中絶し公事と神事をおこし給ひてさ
るらまをいぢま給へも其神の清未は君い弥遠ふ清は
うなまして二百の年經ふまこと菅の根はねもころくふ
大津命の母せまふ百敷の大字人を大木曾や小木るの山乃
五百重なれあしした岩根踏ふとこいまして大王の宮受地
清ふらふ横山とろふつみあけ大祭おるまつらふ卯花のふ
あふ卯月の十日あまより七日の日ちと武士の八十伴は雄池瑞籬

は内ふと外ふも鶉をいひもやほそ天つ星らふまのいお
み遠辺の國人さほふ谷陰の朽木は蟻のきをもいつ赤まおる
ある清はありのそは清ふそ心を鳴神の遠まなきていお
はくもかしこまれやと天地ふらふまやちらひ大神の井は
清いさを望月のまらはしていやしたやわのやもかをを
細ふも花見河をはい夕ふも書見学ちい平らけく安守くて
つれも昔まや此大神の清陰をしつやふふあとも奥の清ふ
あはるも多豆の綱よひもあちかをろつむこれの大神

春雄うおのの机はほやとふから物のつらふささしつら
はとらふふこころある

居ちのらふ百千の國はふつとをえとて、何れもせよの大津國
わりの國の直きてありとも、さうさうからもの見てさうさうさうさう
大君のひろき津稜威と奴をけからの字はををつつともさうさうさ
右七首 春門を伊勢國白子人今在大坂村田次九兵衛とつふ
天明五年九月新嘗祭のはし、えかちりをも題ふまけり
司のちろふなりてよめら 荒木田神主末耦
十一日の夜外宮は権祢宜とち津館ふはとらひて神路山の
紅葉をゆきしきや紅葉ふみとけものさうさうさうさうさう
ひびやとりふも
宮人の忌をなれちひは秘ともさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

聲

十二月 長ちもさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
忌館ふはあらぬを月見つさうさうさうさうさうさうさうさうさう
十三日月 何かし
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
十四日 技穂
けきはしとぬきほおさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
十五日 涉占
靈ちちふ神と夜の音はるて山彦やよむ夜をもあけふさう
十六日 渡會の宮は涉祭
千秋の長五百秋のやちのほの水穂は國の大やしき國内

ちみ、尔生いつる大洗宝の霊ちちふ神や君と尔洗貢物
 初うへまのりて天の下青人草おいのちおくふをまつとのちや
 神代より此豊受の皇神は洗いさをる志のれをいやま
 のはふ新おえは洗祭のちきふとく此皇神ふつてふまけれ
 同し夜宵曉忌火屋殿ふさふらひて
 物忌の父等あきく衣の色はくろまきちうたの洗酒ふまらる
 五丈殿のはやかふ
 圓居しと清さのやうの新ちほり大洗のちあまひふぬしを
 十七日朝
 掛税ちひ八百かひみつ垣ふうけわしふと千額八百額

大御祭

何れもや神とほろらのかけと洗火ふかやうの玉串はを
 おほきみの大洗てらと太宮のちは太前ふあふふら
 十八日長官の洗鼓ふまひのまやふめさして
 神道山てれるもみち葉字つふさし夜もさる物忌のみ等
 右十一首末耦て内宮権祢宜菊家兵部といふ
 寄 草 平 千秋
 小垣内のさゆと花のうらふし物おもふらしけしきつきのこ
 寄 飯
 はきらさのやまはく大刀の二鞘は家へるうたふらつや

寄鈴

音をしてみえぬ君をゆくきの中ふちをける玉のしほ

寄虫

わうこくおまろふるとと蟋蟀のころくやも夜もこのらなく

寄杏

かくはのまよふをしもかけつものうたふしことくおまろや君

玄猪のむらひ

る杯ふま茶をさるしき十月かの日はむらひゆけむとれ

人の家

うたふみるこれのあまはうるむと白か袖このあも花さく

ほろる

夕きれをいさし小川の水蕨ふほつは火ともかけしき

蝸牛ふか

さしいぬるむわの目らを見つやまもち角とのみんる人け眼を

瓜つと

あふこのや伊吹お里の瓜熟うおほふしむきて瓶ふ食ゆ

神賀ひ

天皇の志きほまら國の安國をいらまけく安國やことおけ

ましき神あうら神さひいすい東照神の命は影をや

月日や共ふとあしふかやきまして天の下四方の國を

おしひしとぬぬしくけり此神の免くとたまひく食國不
みちるらちして長きせふふの日こぞふその侍るまひ終
きはつるや人への法の法かけあふとと字ふけ終くわさをたし
つ神ちたまつ。

さちろまきの大侍食國東てる神のみこやを志終免まつしける

大伴家持卿の御霊祭しと萬葉集をとる歌

敷島の倭島根ふ古言の實は文や終ぬへこし此文をよ
大伴はやのちのきみ家ふしと集おのしと石ふるは古言
そと靈の幸ちふ國や言靈の助とるふよやひ終けるその
古ちと此文ふるひてある言靈の幸ちふ國の侍とこの

海やうら免ぬまんは此文をとる

御年の神を祭る時ふよち候

皇神のちはふ八束穂いりちの初穂を醸しを侍酒まつ候

和琴の音ふひりしへを志ぬひて

ほやきしから野の船はぬえくひのそはふることねおちちゆふも
神と君との侍免とと終かこみす

天のちと字ら安國やいぬむたて事なくもねくはらと樂しと

産土の大神ふはつて、

豊年の八束は稲の畝税かけたるわつひくりやまさきとや

右十六首千秋も尾張殿人横井田守といふ

九月十三夜

大矢重門

雪のさしはるまゆをやし、まげは清き空ふと明しくふいてり
わらして久方の月人男の初とほはらうぬ光をたつ層の味を
とみまらうの八月のや十五は月をもた方の月は盛といふへ
ゆ人の國をもは清園ふもちて先てけり志うれととみちた
極むは影をしもかけむ始とふぬむつけきくなくんをては
こゆかむうけやをもつらぬをかこし、そのひとう清園ふ免てそ
免し夜も長月の十日何まり三日のそは夜の月をしもかけ
てもつらぬまらかこみちもとこふれなゆ竹の夜こもるひとう天
地のやもふらうゆをも長月の月を面輪し、うやふよろしも

美人擣衣

未通女らの麻笥のうら麻は長月のさむき夜はらねを
せけてあつたぬれあつたや免の衣袖またけりぬくつぬの
白まらうもたはくまらうの小粒とゆるまから夜うらねはく
みふ面輪ふし、志免らふたおそ花をそし、桜の花もあつら
あをたけけるあや淡雪のこのやもあはれも月影ひてりま
らふちふらし、このときけりうら夜つらま大刀がらへきあつた
ゆしあやしそは衣ちけり身もへてまかたのそちのせんふら
るまらのつちのそとぬらふらし、こも

歳暮述懐

〇八十浦の玉中

〇上ノ十五

ひはまくと綾も忍し葦原の水穂の國を天地の大伊弉
多の國をよるよるとかくまかゝゑて天照のひほめは命わの伊
弉子のちぢきも國やとさし授け給ひて天雲の八重かきとけ
て神くくしひまあはつしその伊弉子のかましくゆゑは
つらいやとあしふ天地とやとよるこのぬ大君とちかまりは
せむ臣連やまごとの緒も清れ赤き真心もちて大君をふらけ
まつろひ天の下治え給へも世の中お青人草も身もおの波罪も
あらはて天やちく神をかこみおの代と地とゆゑの伊弉調お
おこゑるよぬくやとくもぬいふへち千五百代と一代のお
とくをさされるるまゝ伊弉國をいふあゝや神のくろお言さ

やくがらふ國ゆこらふと書やふもけまうお事てしそ
をとみぬぬひ見明らかめはちかまゆくおのちうらその國
ふつを朝廷もとよしやおとほし食國もさぬしふまゑ
ちうつをその世は人みちよとそのみしとけらちちうて月草
のうぬしそろちほいつひのまこのはしそりひやねちけのち
まゝしゆまぬ漢籍のもねとやまゝその本をきかはせてくれそ
其君の何しき志は身をさきやそは身はたそは民もを
はくそみちつけはそくそをたゆらげしそその國をそそひ
ゆりてちおのれまゝそはるまゝしやあろぬき天もこやつけ
村肝のんさそしそかほのくふその人みぬたしそまきそそし

ふる道さ志のれやとぞお言ととるはうのらやもかきらひ
くやくとよく説ちやせれさるれとぞおまらひやつれさかの園は
つらうつられを乱のこ代とよおあふて安らけき時をささく
ふひさくもささくささくささくささくささくささくささくささく
ゆとかれをささくささくささくささくささくささくささくささく
清いおちやしくよおとほへまて鎌倉の平は奴足利のあ
ふれおやとのおきくくよつらひ出つかこくと大君ささくを真
本のあつ山よまさくめ浪よさる島よはつらく天の下常夜ゆ
ちのらつやあるあさくささくささくささくささくささくささく
ゆーかさくを神直日大直日はあふとさきや神の直日やささく

るを織田の命梓弓ひきやととみの豊国は神の命雄く
志らとささくの心出まきし清軍はつらとひあさく千早振人を
も和しまつらとぬ園をささくささくささくささくささくささく
の下ちらひ孫必掛まくとつらよかこさき東照神の命は
大君をひとささくささく天の下ちりとつらせははさくささく
免おひて大君の遠は朝廷や鳥あなく東大城は食国の
事やうもちて政まをささくささく安国のやしきふつら
ゆふささくの栄ゆく時と清國のや學ひの道はうまきささく
道をささくささく人らつらささく古ささくのかささくささくも解
衣のささくささくささくささく八十隈おちささくささくささく

ねふかろし人皆とそまきつみていや日よ小學ふ時一を
おのれも身を下なるらむらむぬれこやぬれけいもの
はつらむらう先や千やまふとふことおんあけ代めかき
ぬくぬ大君の國よまめぬるたことこの當ひは道よぬを
しるむとあへやその名をーつけむとへやああおんを
あくーしれをなまともまふはふけいおんふことまぬぬおん
ぬ年月をむらうはくこと早川のちやんこととらんぬぬぬぬぬ
右三首重門を美濃國大垣人大矢仁左衛門といふ
源長行
空ゆく月影きとみ酒のこてつをふこよひのあぬーきつこと

月

源長行

海邊月

伊勢の海は一志のうねりゆて思ねをせくる浪も月おしり

田家月

唐の聲きこゆる田居よしときつて穂の上をらひ月をるかめ

右三首长行を伊勢阿濃津家士七里松豊

柳

萩原元克

高玉ねら柳のうれれ白露けちらきい見せむ君とあぬかど

秋野

朔夜も衣ひつちて白菅の真野けをたはうらけつとやぬれ

杵人

ついでにこのもふ拙人の舟木きりくふ斧のききこゆ

酒折宮

纏向の日代は宮は天下きりくふ天皇の皇子は命
を志らぬひのひとくは園はまつろもぬ熊襲を平ら
けていくふとらねも鳥啼吾孀の國は蝦夷等を志つめ
やちせや天皇のまけ乃はあくく劔太刀腰もやうりもき百ふ
千は武き軍を國きくつとくひ強ひ天雲のむあひきりくふ
谷潜のさわふるきはみ海山のつらふる神をこやむまてあ
つとまるとき奈麻与美の甲斐は國の酒折は山の折は行
宮を仕奉てあつとくふうふはゆけりその時ゆ火あふ

老翁の新治の湯敷は末をんやくあきまつとさるふのこや
をかろつひて梓弓末の代あてゆとろ人のつらきふふといは
宮ふまのあひるんれもひもくこの今もみるこやとおとほゆとつと
萬代は神さひくめてるはのき葉のかけとさうゆく酒折のうや

右五首元克を甲斐國山梨郡田中村の人萩原平吉

上毛野君田道を与えたる田中美方

出雲の鯁は川土の大蛇こそ國つ湯神の愛子をーやうて
吞けれ神風の伊吹は山の大蛇こそ日本童男の昔をー
胸やけくーき上毛野の田道は君のふー魂乃たれさうら
ちまうらまらーに神もーつれを夢にたれふをさうら

らるるさくららのふれえいー神ふちまちゆくひてゆく
礼をもへちやふかーときひひーの神ふはきりてとちは
しき田道健男のふーし魂うと日本書紀のまじり
山雲膳臣巴提便 大御子の神のまじり
かーちてのちてへの臣を大王の命かーとみ若草のつまらふ
おさひこやさやく百濟ふひりややれとしははゆきよ
白玉のそりうせぬれ益良雄のふはまらひとやむへきさへ
ちうなると大雪のひをれるうへかーとさや虎やふ神
のゆきかひー跡を不見見てはちう男のふをえらとを
はまひりうみいきや保るうさやまひよりあやし討てー

やまむやづるきぬら腰もやとさき身もーと甲のうきをま
まらさの残るふひー勢大雪をええらうーつぬさる
叡の岫も不見行ておるきのよかみ取志をこら挙とらう大
王の命かーとみ志浪の立塞路を舟たつとひらうこー
とまららうかぬーたかや子をおもふたけはひとぬちを
れとまらうつむを玉きたる命ちもせむよりあやし
討てーやまむひきーとまらうちあをへとむひらうちあ
席のちゆるぬきを深やまをしひふと息もなひかしら
るひてうらぬかみつうらうの古をひゆきととちて細太刀さや
ゆめさ出さしーその皮さらをうつ訓もなきてかみらう

おほきさみの大に涉楯やうきせむる巳提便の臣しつやゆい
そしと

右二首美方を美濃國大垣画師田中洞慶やうふ

十月のころ山田幸來やうとちうひて美濃國兼老の滯見

よゆきやうやう 渡邊直麻呂

かけまらんと綾ゆあーこー古の大涉門青丹よし奈良の宮お
天の下ちろーえーなる天皇の神は命のいてまし、多度の
山ち羊魚市アユチカダ縣わのちむ里ゆ朝よひゆ見放る山はろくも
みらるひ山その山ゆるまらちちのれて老人のここのゆちふ水を
たさやうのちちよまきくち、見まくちをここれをまねやうとまゆの

しふられちおとへや玉おこの道しやちけさ見まゆつむきん
ちらぬらよち玉のやしをねまぬようちゆのちちちつちらよ
小山田の山田は君はきくきのはたくの君ら山のおりやの里
のふらちよかちりみゆくやいさまふとわをいさちんちんちん
けらちゆふちつらりま松旅よきひしてちちちちちちちち
はことほら高田の里はらろくよいゆきゆりて又ちらち
るは里人のちやひをもさちひやちちちちちちちちちちち
ちいかにね月志られの雨はちれくちるちのちれまゆちちち
ふた峯よゆのちをちちちちちちちちちちちちちちちち
おとーきみねとまもちちちちちちちちちちちちちちちち

ももち葉いやはけよをたるとけみ子朝日ぬきほくらん
を夕日ぬきまうらうぬーときぬふあど志けをききえてい
ちむろと神さひぬてりやりのち後ふこやぬき山の山並はよる
し山多藝の野をばきらるる多度川のるまむやせ
ち栲の穂ふちふみする白玉のるまむ川内よが女らも赤
裳はきひきや心をたるとら葉かさしはらうききうぬけ
るきぬこまよーたひとやきさけてもぬーもぬくはらふけ
ふをし千とぬめとひひしきゆらむあ代もかろしきてむかれ
ころむかしの人も老人のおうぬちふ名ふ肩^{オノ}せけーき
やーのちよ又かへとむも足れやーらぬをわらうゆちふ多藝の野の上

右二首 直麻呂の尾張名見屋人渡邊惣左衛門

春のさーえよあ

藤原朝臣重名

はかぬきしひぬひうら神路山神代のきよめちかへるこのと

伊勢よわうけるころ國なる人のちやよ

神風のいせは淡秋をりふせて旅寐しをれをける花のきけ
るあーるふと秋の葉はまぢふ夕と村肝のころさふー
おとしぬくわゆるはひるふ藤玉のやーけぬぬれも君のえ
のちやまこひーくおや、ちけふみきし見れをまうさくふ
かとしちぬちゆむくしけ二見のうらね沖つ浪よきる白玉
るつぬふよける志保かひふもいおきて君もあたまうけ

くはちーき友よとみせよはけ長くつらきいさへゆかひ
ぬして家おとふそのかゝるやいおそいて

長門國一の宮住吉大神も詣て

あつゝぬめ神の命をいへぬるやそはかゝる國を神なつらむけ
あつや大津身も鞍やりおそく大津もみちをりそく
津軍をいやもいぬまひうらみをもたれ長門の國はあよふひ
のを浦に宮をかり宮とさるえあつひて小山田の里よひてま
しいちひへとらはいちうきあつむをちつみぬきふれけ
まくちかゝこふれともいひこのえは荒人神船の舳みう
はきまゝして津軍をぬきけあつひ平らけらうしあつひ

ねきぬまひはつらぬまひいよーこのふるき宮居とみ
やはらあそしきふて、あ代もゆるこやなく今の代
あつとあつと人あつのまあてあつらみ朝夕もあつと
こまつ此宮所

右三首 重名も豊前中津渡邊上野介

時雨

栗田真菅

海の面も夕日うつつ墨の江はあつら松原しとれふる見ゆ
川

射水川うちあをひろくこゝ舟のあつらうらふ声あかき

神祇

因内みねふと心なしくらら山あつまる神の伊代ちやと一へ

右三首 真菅を遠江城飼郡の人栗田市右湯門

落花

鈴木書雄

まふかみより野の川さふくこのおもふらふららの花散みよ

霍公鳥

うのとねめ咲ちる岡をさけやまを写てさるる山ほとさきん

初秋

あゆみけのうれさおしなふくこのまよあつれて秋さきよけり

意

みらほしきとたもの里をるうてぬ山おしきけむよ力とわか

右四首 書雄を遠江國引佐郡堀内村 鈴木半藏

引馬野の芽子花をよめる 高林方朗

駒なへて伊獵多やまやとのふねよまやうをさる梓弓

引馬大野を旗さるき穂も出る秋の八千種お花さくら時

も夕あぐのわかゆきこのゆに真萩原分つるれを綾あま

かり装ふのうらるもてお花咲をま白珠を巻やもゆる

と思ふまで夕露負て目細しくおつかしきるをうへあ

るれのま萩を棹牡鹿の花婿なうし狭舟頬相花の

るまふふーいれやうめうと

折れさし芽子の遊ひせむ引馬野もまやいとさまを花ちぬと母

詠雄踏浦歌

ちやえらのらぬける玉の志玉つくをふみの浦を海ぶの息れ
大神神なるら言知ぬく磯山の樹もら志みさ里人の家
並一きて細引きや小舟うけは急塩やらや煙る多なる浦
をよみうなるもつひきき後をよみうへと塩やらをこをしと
凌もやも一みこそしとゆえぬくしと往えくらみれ
やとつひくちをふよせある浪の志くくもつうかよひ
つちちかくの岸お杉原まつちらみ見か糸し浦も大神の
志くを志くし清き白浪
雄踏のうら波間ゆえゆる松かけを小舟をきかむ細引きらら

海邊春望

いさふふち春日のやけく長浪の澳つはつひもわらわかりてな

右五首 方朗も遠江長上郡有玉村高林舎人

若菜

藤原朝臣重年

石上布留野の茅原歩ちをらさけおつとこのまわつむらむ

春恋

かよ越のちわらわつむをみてしよとまきの春日を志つくくれ

海邊

瀉をよみ浦をらるしみをややらあ玉藻かすらむ注の江は浪

内山真龍もよやとをいして出雲國へ行けり時

島根のまきみのうらを胡をきよこたえて見られた神さふ
る山をたけもほよきる海をたれとと天地の事代ぬ
や名がせる神の清もとら魚つら、この美保のさ
ふとく崎つたや

右四首重年を同國周知郡一宮神主小國越前

霧

山下正彦

まのたはるをこしとをんなくたまりかちぬ引る野のさ

鴨

る山つらつら引佐江も鴨かひきとく彼をさめりか

出雲國意宇の浦をゆく時釣舟を見て神代の

古くやをわといて

おらの浦は沖こく舟をうつ針のやをこくもさきつるか

右三首正彦も同國豊田郡敷地村山下武助

國賀欽

石塚龍麻呂

かけまことゆーのしこー二柱清祖の神は天地のまめ
の時もくさーとさみぬーま、たまつたほこれのやま
は味のうらそしなれるやつ國のまらひなるまやか
やーあらめやかしのみはえさうぬけてるまやか
れち松うのゆるる神世は神呂伎のうさー
のやたはのきはよ言侍らうけつまうて神ぬらうさ

まふち大君の大御心をやまかきとあふてなむく民もそへん
とち引の山田のひひのあふふもまらつたあかしくおこ
あひも直くあふく御國內もゆめけくやみて四方八面の
こまのこまめ風のきけ遠きあきて玉ちちふ神は御
國や目日あひあきかしくこむあきつしまやあはる根
そふふやくつりけ

まふち

いさまくもあやまかしくこま神呂伎のちまのほもまき光
我日のあひの宮柱たきあて天の下まきくあひなへ臣連八
十伴のそもおのあへつあひのまもあはるこみてつこへる

まつる千五百代と一代のこまく神あつらさをさあふまふちも
大みいつあひくかしくこく平らけくゆめあつらあひ天地のそこ
ひのうらもあひいねき君もあきふくら安の國をけ國をけ
まの君もあはせまかろ國のこまのあやせり一野川をや
くまあきを朝廷へあはせまらまをしをまおてこぬゆめあひ
うらむ禍つ日の神かさふらむより急やしく今あひいともあつ
あはら青波あつらたまきやうりあなやまきあひあひとあ
いさあひふせて鶉あひいまひをやあひかしくこまあつ
らむあひあふあや家大王のあひあひ水穂の國を咲あふ
桜の花あは盛あさくあひゆくあひ春へさくあひ藤のうらあひあ

やまの國

元日

鶯

物こそよまなち神世のふもふもけふのふもふもふもふもふもふもふも

かきのよまなちをよめしむるまをよめしむるまをよめしむるまをよめしむるま

淡路國玉神社ふもふも奉る

ふもふもやあきを廣くはかしきまゆきまふ國やつむ神

富士山

四方八面も山をいれとも日本はふーのふもふもやまの大王

古事記傳をよみてよめる

うやうやしくもふもふもかともう上代のつりかさうつはこれのふもふも

玉洋のきや八十隈まつもらふもふもあふもふもふもふもふもふもふもふも

女の機おる所かひるるも

音もふもふもふもふもふもふもふもふもふもふもふもふもふもふもふもふも

清原重正神主の方内るるを悲しむてよめる

かくのみもつりけるものを梓杉のさへもあつてとあひききしれも

右十首 龍麻呂も同國敷知郡細田村石塚安右衛門

縣見も行てよめし長致 田尻真言

つゝ玉の年つる秋の八束穂れ足穂の稲をびちらふも馬も太

る小原せもてかゆきつゝをだ里人らうめひふきてあふもふもふも

心そなく見れも村肝のこころをさへゆくゆいよ

木綿の傍もやせれる夜千鳥のなぐさきて

きよなるふらうりなくぬりちうつくゆふの候風さむく吹し

八月十五夜もよりの國邊は秋の田林は

琴の芳は聞えまよひをこころい志のなきは月まかきしくやれ

寄草玄

あつめられたる草のかりそちもけいひえく妹もさうらえぬふ

寄國祝

久方の天は侍柱千五百代とくこれぬき國をさしの大伴國

右五首 真言も筑前福國家士田尻梅翁

雁をよめる

川村正雄

らゆらうの梅の田面かりうねのゆきてさうらうはむき夜を

大平を名見屋尔末まきて帰るとはふとういふ

まけさしはかぬふもさうつきぬくはあかのさゆわさうこのう

右二首 正雄も尾張名見屋人川村秋輔

七日夜

穂積真實

天川ゆふもさうらぬいさるもま楫あぬき今もこれて水

虫

ぬもまのなのさも夜をわつやうの垣をさうらふさうさうさ

大平ぬもさうら

伊勢の海らひらのそとゆかちふ白玉まむりしを得しこと

右三首 志實も尾張家士鈴木仙蔵

萩

稲葉通邦

むしのきおきもく秋野ふわけの衣を甘きふもむいぬるか

右一首 通邦も同家士稲葉喜蔵

鹿

大橋直亮

多度山のつらさを寒さゆきしつきの妻やふ声のかなくともつら

右一首 直亮も同醫師大橋丹治

藤花

植松有信

言麗叙吾家の松ゆあつちりてきける藤波よろけ代もんむ

享和元年本居大人を山室の妙楽寺山中におきて

そのおど峰の庵もやうりかてとんる

鈴屋の大人は命をこまらう山の上も大鳥のちふとまら

して人皆をひぬれや二人三人峰の庵も旅居して

湯墓の前も朝夕ふれうをるるよるひるやさもらひしれ

ち足引の山はつらと谷川のおれなつしをき音のせきんさ

ふーくつやもつぬーも

夜もまかり湯墓まららひ朝もまのきの一なくと峰の庵も

つらとひもつらとひもつらとひもつらとひもつらとひも

おれまのおくつまらららる廉自物もひふつねのうーなくと

山室の侍墓所をいらひのこをいしを夜昼やしらほしをやくぬかぢりも
あゝの大人の侍墓所やあゝの目あゝしておつゝまつれやうぶのあゝ
侍墓つゝをいして松坂もあゝる目

山室のさる山れより大人をおまてわうれいこれらけいこもあゝ
山をいして花岡やいふ所をゆかちを雨ふりていふいふいふ
花岡ゆかちをいふいふ山室の侍墓所をいふいふいふいふいふ
右九首 有信も 同家士 植松忠兵衛

鹿

あや山の山立ならし啼啼の声きくううもいふいふいふいふいふ
右一首 左幾久も 尾張名児屋山田新助

鶯

藤原磯足

あつぎゆいもあゝいふ朝もけいふあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
大夫重門も松坂の猿居ふ出りいしていふいふいふいふいふ

梓弓其の志け野の重門のわあせの君い君のさむるの丈垣
ちおののさむ起の里ゆららかきのるらあゝいふれも奥十川
あまらゆく漱のさやうう相んもいものいふあゝあゝあゝあゝ
いふあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
から衣けまさらたもさくさくの鈴屋大人もあゝあゝあゝあゝ
いふいふ神風のいせけ國ふ松坂もわのあゝあゝあゝあゝあゝ
早くあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

ふ君をうひててまかきんふちひくそのおちくひひひひ
く心ちねきぬ

志ぬひこく君をしんれまもたぬひをもふひとあきちおもちぢ

右三首磯足を尾張起驛本陣加藤右衛門七

背振嶽をえやまて 青柳種信

神のまきせありの山ゆふの雲をるあおぬきのふれてぬらむ

於呂島を朝ひききくそちん瀛津島をえやうて

いとちりおろの海をまぢくし神のちとこおきつゝまえぬ

香推沼

檀日か浪間まぢくふ保つらのらぬまひつゝあさおももち

春のはく先のうら

うちちひくまぬれちぬあしり川をの柳いやくちちちち

寛政六年三月宗像郡瀛津島ふ防人ふよきれておの

る山もわうてちりける保り社もまうて

天地の始れ時天照日女命味凝の綾ふ忍き神語ゆのら

くふまもく三柱の姫大神ちわくの北道みえぬふ志ぢ

はりて御孫の命れつこの本れゆ継くもちりしを以天津日

嗣を守ませさちはいまをと言よさくちりしはくちをくち

あも清言のほもま天をを八重めきとひて筑紫なる崎門

の山も天降るいまちりて水江の青^{アラ}薺き真玉を瀛津島こ

け大宮の侍あふしやいふふらら八坂瓊の紫れ玉中の宮
のあふしもかうし八咫鏡とていひて邊つ宮の神は侍形
とのりいひかうしあまもいひて今のをあふし福草の
三の宝をこやころの神はみこいひてあまもいひてあまも
うるあふし身の形は宮や侍名も負せると

右六首種信も筑前福岡家士青柳勝次

京もそのいふとれ吉田侍社も侍とて大内裡のむ

芝原春房

八はーらの神はみらうかろれをけかみのぬのこのなるころもあふし

右一首春房も伊勢津人芝原六郎右衛門

橘

松居安國

はちのてもかおとへし橘のそねれさかりもなうふけるころも

名見屋中ゆきとていひてあまもいひて田中道麻呂らや

至誠院てふ寺もつとて

尾張の海千田のをいひれあまもいひてあまもいひてあまも

右二首安國も近江彦根家士松居正平

海

鈴木朗

見ころせも浪の間に見ゆ里あまもなうあふしあふしあふし

山

風ふけりし海の浦まよふはのおやきくやまの山は名も

船

ま海原の八百後を安寐して伊行くらふ船しるるも
楫のききぬさえてきけとのれも舟八十崎山をちやさぬ

梅

宇米こころを春のそつ花をされをまのそつ花のきれをらは那

九月晦日鈴屋大人をまつる家もて

秋津彦美豆椶根のわら大人を志ぬ心まつると神みくら
いとひ清めてつらきもかけの清かきとぬる山の倭こ

うらみかきしるるのこころをされをまのそつ花のきれをらは那
壁もかけおれたきしるるのこころをされをまのそつ花のきれをらは那
まつつてあつとやまをまつらるる今更もあのおもはらや
ひまもくもあつらるるならむ神直日大直日の神みくはるま
ちやうけむ秋津彦美豆椶根のこころをされをまのそつ花のきれをらは那
掛巻もちやもかきしるる皇神れ道の隈回をおくふらるる
ふらるるして空蟬のせれこころをまつふさふらるる
して石上ふらるるまをまつるのよやまをまつらるる
ひまへのおやや天の下四方れ入らるる月のひらまをまつらるる
かみれるふらるるのふらるるかみれをまつらるる

靈らちふ神のあはれも秋ついでみつ櫻根のうららきも
秋ついでこころ櫻根の大人こころも直日の神のみこまぬりもむ

右六首 詞を尾張家士鈴木常介

鹿子島よて 山地今壽

いもいも百船よていこの葉かろいも今もあせよけるも

手結山よて

満きら鐘のよ結坂後の朝あらけ鐘よよかきむ遠の國原

室戸崎よて

志かろのやう阿波よけける土佐の海よるの崎あけつるもよあせ
きるれもいさもとるい紀路よ名かきま熊野のいさあけ崎あ

あつこのいもをきくつらけけるあつぬひのつらふむかふいぬたの
はこの津崎のよをやあまの眉引なして波の間ゆお保もええ
けりこれをおきて又目もかろる山をなく國をちあけれを久方
の天もひとふ常世浪立ちつつかきりぬくはてしなけれ
たいつる日を海ゆりてあけ入日を海もゆりぬれ言れ葉も思
ひもあえぬらやしくもあふるる海も奇しくもあけりぬる山
のあると傍神の面輪しくやもとるいも
あつこのまあつあふなきて天雲のむらあけまをみ波もあつらるる

右三首 女壽を山城伏見産土佐家士山地覺藏

苗代 藤原朝臣吉埴

八束穂もさのんむやしをふまひつとくふるふ田ふき

をやちのたうひく所ひけるあや

朝花

月もみのひつを清らうらうられてかたをんたうを若まへ

海

あつこのかたは花の海をくみちのふんを沖つさうぬふ

鈴屋大人を志あひまうて

いせの海れあそこのはれやうくまを幸くんとつやあやい

右五首 吉道も遠江城東郡高松神社神主中山豊後守

鹿

櫻豊麻呂

向つ峯ふ志のそなくぬこの夕妻うらうらもらわれもの鹿

旅のうら

はくちみのらふこれ海をこきうしをを収うき比良の山かあ

意れうら

あふふしはまうらうしあうらうひきのはれをのゆ妹のらうら

夏のうら

そらあふふあうらあうらあうらあうらあうらあうらあうら

右四首 豊麻呂も同城飼郡櫻池社神主左倉式部

春のうら

藤原朝臣真重

よめ葉しむるもよめしむるもよめしむるもよめしむるも
殿の侍あも免して古今歌集よめしむるもよめしむるも
花さのぬめともなけり古の歌よめしむるもよめしむるも
さへくの賜おやもかつけしをぬるの中よ續のまぬ
さへくの賜おやもかつけしをぬるの中よ續のまぬ
さへくの賜おやもかつけしをぬるの中よ續のまぬ
さへくの賜おやもかつけしをぬるの中よ續のまぬ
又思ひぬけしむる

底書き侍川の國名ぬし吉田の里も代々重なりしをた
ぬまに招きぬ殿の命を船つとふ江戸の大城も年々く

侍司あはく老人やつうへまいつ天の下四方の民あうち
たひまはらゆくさを侍もよめしむるもよめしむるも
る武ま侍稜威をぬやあし示しぬいて梓うその本末
らきらあもさるしこまもぬちの書らまもぬし吉もを
とおちしぬやあしむるもよめしむるもよめしむるも
や侍歌のをしへをも傳へむものも數ぬらぬをちぬきぬ
とさるしぬも免さけぬいてかしぬたや侍あも免してさ
きや古今の歌よめしむるもよめしむるもよめしむるも
かきさるしぬも免さけぬいてかしぬたや侍あも免してさ

右五首 真重より三川國吉田某神社神主 鈴木周防

送遣唐使とらふことを以て 源朝臣正房

久方の日北入國もつるはさるる大御使の船出ゆりも

浦郭公

あらさきの名言れ浦の深とさきい多るぬのくたのれ人のきかぐ

海量法師のあらぬまゝとさる

長人やちのうへにまをせぬれにの君のちらひけ八束とさる

室壽

昔兄子の此新室を柱をもさるけくちり板をも度けくちり

さ板の度きこのやも柱をさるごとく弥廣のゆやさる

三枝のさるくちのさむ此新室を

つらうもよ長らくいませ今つらう新室のちり八束とさる

右五首 正房と甲斐國酒折宮神主飯田大内藏

菅原繁根

得食むる入港後の島にかけとものゆるれみぬとも船をさる

の立ふれをさるちりも百舟千船のれを朝ひくきとさ

れをいぢれま入てうはるうの綾もふきをさる由良の海を

はるまの家の崎やゆは渡もさるぬや郭公の智をさる

海流ゆく流ゆりつれを深とさるこのまかむやゆりゆり

難波のちまきて堀江をさるれむとさるちやちや

ふりけれと

夕べのふらけやみも極江川毎こまゆれももさふ
一日伏見の空流え山やうまのありて
三堂ふく風のゆもくちまつるた若葉やとよの異竹のふ
ゆらけたまをまきつち生あつちやあや流見の山ゆのあり
ふらわのえさく山を巨椽の入にれ面を天つてふ入日てり
うり物部の空流れを里まきつちのま葉れみさう
くまういもえさてりやもくちまつちのけをけき竹のそ
ひもくれちかちきやこの大君の大御門まきいまま
一々の平北流里うら母の國れまわらまはるま家かの
ふら極あちまれまひもけりまわらまはるま千早ふ

るや流見の山をおとるき山

右四首 繁根を土依高智家士千頭球七

名所花

今井惟恭

い波やわれもしちみれ山さくらさくら花も咲もあひける
冬夜圍碁のこともはらさくふえて

その中け遊の道も古ゆ多ゆわれやをわく國の遠つ代志ね
こふましのあひもつちてきれ人の心をくさも造れつとつて
へる圍碁^{キゴ}やらふもはみれことさうるはき樵^{カヤ}の材^キちけ經
緯^ヰふも助引^{ツグ}きり盤^{バン}の面^{オモテ}も白き石黒れた石も
うらわくや遊ひの敵さむい身ともさうれてかき

相つらむひては一人うちかつまへ勝きひも類かまむて
 ろさる保るひをれままけ入るるをなむま一月の
 誓の浦もはらまてきれもこの男中らまてくまけて
 らしむかむもものよけくもらぬも傷も見居る人をも
 おのちも黒をえむくさかちも横言のひてらるる
 せむもくしむもまむくしひもゆきもくちまけまら
 ちかしくりやまらもおなへ敵中つひく相らるる
 のふもまむもむもむもむもむもむもむもむもむも
 ふおらるまむくくもむもむもむもむもむもむも

右二首 惟恭も石見濱田家士今井清生

遊

あふらるるむらむら

竹村茂雄

朔よけふ神の侍まむつきかへちあやむむくしむも
 そまや君の侍のうさをかこもてあふの舞まむあふ
 はちらなむむむむむむむむむむむむむむむむむむ

秋のはし免むら免る

ふの暮るふよあふ

公も田らかむしむしむをちあらむてあふらむむむむ
 かゆもむもむもむもむもむもむもむもむもむもむも

大カ

村肝のちりけよかなふ大刀とかなふるけきけとれて男さひびむ

右七首 茂雄と伊豆國熊坂村竹村平右衛門

鶯

小原君 雄

朝まぬまゝくちねそうち羽ふりうきなれたぬまきふつらーを

原

まむらふきく螢の玉ちちとひら心てあゆめおゆらぬのよ

安足の家の萩れさかりゆ人こつひいて秋よみけとた

まふれよとくものふものおひきとらつひひつまつたのちきひせむ

右三首 君雄と近江彦根家士小原八郎九衛門

初

村田安足

そつひこのつらふれきうき山をゆかきつーやゆきと見む

萩れちうりふ人こつひひきと秋よみけとた

萩の花よなき秋とことあまもかくまてらきくみやひをのやと

右二首 安足と同家士村田大助

大神官よゆらて

長瀬真幸

神凡の伊勢國百舟渡會縣物部の宇治れとことまを

の山れ木立とちゆゆの川とやけくまきり志うれと

遠つ歩代とままふらふとまきまてあゆしもま

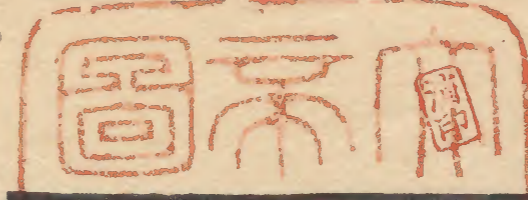
まりあせれ聞しことまあや尊くかことと神さひふまは神

の大官

七日夜

石上よりゆく代とてその人れはひつぎけらく天なるや柳を
つ先ちけりまの年れひとせまらしくて逢ねたまよひ彦星
とちやらひ見むや久方の天れ川系の夕暮か由衣よひつら川
彼岸にゆいぬくしてやゆきういひひききやよふあゆみ
あふりまのそ川ふあしまきうさこりかろくわらうかゆつ
さねをふけなむ
人のとやうとて柳を折ておろけふ
山里のあふりなくを柳花よく候そあしりるをばま
師の大人のさねへる又の年れ秋より

さ、鈴の五十鈴れまの鈴の屋れま大人もとてまぢま
神の傳代より石上言とてわらうつきらひつねまわら右
言れ言の心をわらうのまれつらしくふまをかみ見し
まらめてかましくの書もまらうて真直なる倭心をねもて
るふさやうと長くも古事の本れ道のわらなるの親とて親
やまつ水にゆきかしくみ位見なれ志かひまらうてま枕旅
めまらま年のまふゆきかしく朝日もふわふ山柳花とをまらるちの
等やまらけらうひく朝日もふわふ山柳花とをまらるちの
詞れ道をらけつひをうと長くもかろく常その信れま
信のふやましくふ有かろひこやまはむと大船の思ひま



みてるあなく赤のふ小わの君の侍もや仕一小月か
 つれのふをこころと志くれのふをたゆ
 つこころのゆふてる月のかられまぬや玉
 梓のふよりゆきてやふ唇のきれなきつらう玉の年を
 預ぬれや形見ゆやのさる侍像を越らみそてまれをさ
 ぬ

ふもさるつこころ、候とゆみの新表のこやとなんきつ
 る

川八十瀬の波をうごころやとむのしの人ゆまこらちやゆ

右五首 真幸丸 肥後熊本家士長瀬七郎平

